

大学英語教育におけるラーニング・ポートフォリオの実践

中 川 洋 子

はじめに

本稿は、英語を学ぶ大学生が学習内容を振り返るとともに、授業者が学生の理解度を把握することを目的に導入したラーニング・ポートフォリオ（学習過程の記録）の実践を検討するものである。

本学が、ファカルティ・ディベロップメント（FD:大学の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研究及び研修）の一環として作成した2015年度の外国語教育センターアクションプランでは、「学生のニーズに応じた、きめの細かな教育を行う」（大項目2）という達成目標のもと、「各学生が満足し、効果的に実力が身につくような教育を目指」している。

そこで本稿では、毎回の授業で達成感や満足感が得られるように、各授業で何を学習し、理解したのか、そしてその授業が次の授業ではどのように発展していくかなどといった過程や今後の見通しを視覚化し、手元に残すものとしてラーニング・ポートフォリオを試みた。

学生にとって、漠然と英語の授業を受けただけでは、確かな英語力の実感、何かをやり遂げたという達成感や満足感はなかなか得られにくい。日々の英語の授業では、芸術作品を作成したり、スポーツで記録を残すような、精神的、視覚的にも達成感を得られるような結果を出すことも難しい。

本研究の背景にあるのは、学生の学習への動機づけ（学生による自発的な学習意欲、つまり「内発的動機づけ」）の問題である¹。英語力を身につけなければならないという意識を持ちながらも、必修単位であるということを除けば、英語を学習する具体的で差し迫った目的はなく、学校の受験や英語検定試験等を控えているわけでもないとい

った学生は少なくない。そのような学生が、授業を通じて何らかの達成感を獲得し、それがきっかけとなって自律的な学習へと発展する方法として試みているのがラーニング・ポートフォリオである。

本稿では、筆者のラーニング・ポートフォリオの実践を紹介する。第1章ではポートフォリオの研究状況とその特徴について概観する。第2章ではポートフォリオの実践について、第3章ではポートフォリオ導入による授業の成果を検証するため、学生のポートフォリオとアンケートの結果を、

（1）英語の学習内容の定着に関して、（2）授業への動機づけ、そして（3）授業者による学生の学習状況の把握、という3つの観点から分析する。第4章では今後の課題について検討する。

1. ポートフォリオとは何か

1.1 ポートフォリオの定義

一般的にポートフォリオ(portfolio)と言えば、書類ばさみや紙ばさみ式の画集、作品集や、金融機関で用いられる金融資産の一覧表を意味する。本稿では、教育学の分野で使用されるポートフォリオ、つまり、学生が学びの過程でその達成状況を主体的に整理点検し、その記録をまとめたものをラーニング・ポートフォリオ（以下、ポートフォリオと同義）と定義する。

Danielson and Abrutyn (1997) は、ポートフォリオについて、学びへの参加、技能の省察と自己評価、伝統的ではない方法で学生を評価する、そして保護者とのコミュニケーションの促進等に役立つものであると指摘している。土持(2011)は、「深く意義ある学び」について「リフレクション(省察)」と知識を「活用あるいは経験

(Experience)」することであると述べている。ポートフォリオは、こうした学生による授業の振り返りと省察と、学習した知識の活用を視覚化したものである。

また、ポートフォリオは明確な目的のもとに蓄積された、個々の学生の「作品集」である。その「作品集」の全体を見ることで、学生の成長過程を教員も学生自身も把握、評価することが可能となる。

このように、ラーニング・ポートフォリオは授業を通じて作成した作品の「作品集」であり、「省察」の役割を持っているのである。

一方、教員はポートフォリオの記録を活用して、その日の学生の理解度や、どの程度その教科の到達目標に近づいているか (Bernstein, 2006, p. 82) について、多面的な評価を行う。ポートフォリオには、学生の質問や感想等のコメントを書く欄があり、教員はそれに個別に対応したり、次の授業の展開に活かすことができる。

ポートフォリオは、他にも教員の評価に使用されるアカデミック・ポートフォリオ (教育、研究等の記録) と、教員によるティーチング・ポートフォリオ (教育改善や教育業績の記録) がある。本稿では、学生によるラーニング・ポートフォリオについて検討を行う。

1.2 ポートフォリオの歴史

そもそもポートフォリオは、テストで測定できない個人の能力や知力を測定するための総合的な学習評価法として、ロンドン大学のS=クラーク教授を中心に考案され、1980年代後半にイギリス、アメリカで取り入れられ、1990年代後半に日本に入ってきたものといわれている²。アメリカのポートフォリオ学習は、1930年代アメリカの教育界に影響を与えたピアジェとジョン・デューイの思想に基づいて発展した (小田, 1999)。小田 (1999) は、ポートフォリオ学習とデューイの関連性に注目し、デューイがその著作の中で説いている「経験を自分のなかで咀嚼し、振り返ること」、つまり「学習における振り返りの重要性」、「学びのプロ

セスの重視」が現在のポートフォリオ学習の根幹であると指摘している。

日本国内では、中央教育審議会の答申『我が国の高等教育の将来』(2005年1月28日)の第3章「新時代における高等教育機関の在り方」で「単位制度の実質化」、つまり形骸化された単位制の見直しと、学生による「自学自修」を促進している。土持 (2007) は、国が「能動的学習を『単位制度の実質化』として具体的に求めた」こと、それに伴って、「教員側からの視点だけでなく、学習者の立場に立った成績評価のあり方が注目される」と指摘する。そして能動的学習 (アクティブ・ラーニング) のため、学生の学習実践記録をまとめたラーニング・ポートフォリオ導入の重要性について強調している (p. 58)。

1.3 大学教育におけるポートフォリオの位置付け

国内の大学教育においても、学生の能動的学習を促すためのラーニング・ポートフォリオや、教員によるティーチング・ポートフォリオの実践が多く報告されている。ここで、本稿でも言及しているラーニング・ポートフォリオについて、中教審の定義を確認しておきたい。

学生が、学修過程ならびに各種の学修成果 (例えば、学修目標・学修計画表とチェックシート、課題達成のために収集した資料や遂行状況、レポート、成績単位取得表など) を長期にわたって収集し、記録したもの。それらを必要に応じて系統的に選択し、学修過程を含めて到達度を評価し、次に取り組むべき課題をみつけてステップアップを図るという、学生自身の自己省察を可能とすることにより、自律的な学修をより深化させることを目的とする。従来の到達度評価では測定できない個人能力の質的評価を行うことが意図されているとともに、教員や大学が、組織としての教育の成果を評価する場合にも利用される (中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて (答申)」用語集)³。

筆者は、中教審の定義内の「学生自身の自己省

察を可能とすることにより、自律的な学修をより深化させること」、つまり、何を学んだのかということだけではなく、学習の過程を振り返ることが重要であると考え。この振り返りによって学生の自立的学習、学習意欲の向上へとつなげられることを目的に、授業内でのラーニング・ポートフォリオ導入を試みた。

2. ラーニング・ポートフォリオの実践

2.1 授業へのポートフォリオ導入の目的と背景

前節で述べたように、学生の自律的学習と学習意欲を高めることを目的に、授業においてラーニング・ポートフォリオの導入を試みた。

実際日々の英語の授業では、自己達成感を得たり、自己評価する機会は必ずしも多くはない。また、授業の予習として教科書を読んできたり、単語の意味を調べたりしてくる学生に比べ、授業の事前準備が不十分な学生は、授業中に指示されたことに取り組み、指示されたことをメモし、特に何の理解も達成感もないまま漠然と90分過ぎてしまうことが少なくない。

このような状況の解決策の一つとして、大学教育でも注目されているのがラーニング・ポートフォリオである。一つ一つの授業で何を学習したのか、何をやり遂げたのか、そして今日の学習が次の授業にどのように発展するのか、などといった授業の振り返りと今後の見通しについて視覚的に整理し、自己評価して記録に残すことができる。また、筆者の授業では、学生は授業終了前にポートフォリオを作成し、提出するという授業の流れが事前にわかっている。そのため、ポートフォリオ作成に役立つように授業中にメモを取るといった、授業への参加の動機づけにつなげることもねらいとしている。

一方、教員は学生のポートフォリオをチェックすることで、日常的に学生の理解度や問題点、日々の授業の進行過程などが確認できる。たとえば、自ら否定的な自己評価をした学生のコメントは、授業者にとってその日の授業を振り返る機会になる。学生の反省点は、今後の授業展開の軌道修正

の大きなヒントになるのである。また、ポートフォリオの記録は、定期テストや課題等と共に評価の対象にし、多面的な評価につなげることが可能である。

学生が変化していく過程を見ながら学習支援や評価が可能であることも重要なメリットである。学生には、テストによる評価や、他人との比較ではなく、自分の成長をポートフォリオを通じて実感し、自分に自信を持てるように促していくことができる。

2.2 分析対象と方法

筆者が授業を担当している英語 I、英語 III の授業で、それぞれ任意にクラスずつ選んで分析の対象とした。

シラバスの英語 I、英語 III では、「基本的な英語で述べられた内容を理解する力と、自分の考えを英語で表現する力を身につける」ことを到達目標に掲げている。この目標を達成するため、英語 I ではまず基礎的な語彙、文法等の復習から始め、英語 III では、英語 I で身につけた英語力を補い、さらに応用力を養成することを目標に、授業とポートフォリオ作成を実施している。

前節でも述べているが、以下のような流れでラーニング・ポートフォリオを実施している。

- (1) その日の授業の内容の復習となるように、ポートフォリオの問題を用意しておく。
- (2) 授業終了10分前にポートフォリオを配付し、学生は各自でポートフォリオを作成する。
- (3) 学生が作成したポートフォリオを回収して授業を終了する。
- (4) 筆者が学生のポートフォリオの採点とコメント、自己評価の確認をする。次の授業でそれを返却し、簡単な解答、解説を行う。
- (5) 学生は返却後のポートフォリオを見直し、復習することが義務づけられており、学期末には、復習済みの全てのポートフォリオを提出することになっている。

次の図1は、あるクラスで使用したポートフォリオの例を示している。時間の関係上、授業で実施した内容の一部ではあるが、毎回このような復習問題や、その日学習した文法を応用した英作文

などの問題を用意している。この日は特に分詞の復習に焦点をあてていた。また、SVOCの構文の確認はほぼ毎時間実施しているため、この日も教科書の文と応用問題(星印)で構文の復習を行った。

<i>Personal Portfolio</i> (英語 III)	
No.	Name
Date:	(出 / 遅 / 欠)
A 今日学習した内容	
B Review Questions	
1. () 内の語を正しい形に直しなさい。	
(1) Around 1960 a small Japanese company (name) Daihatsu began exporting a kind of auto rickshaw to Thailand. ()	
(2) There are 13 national holidays in Thailand, (include) the King and Queen's birthdays. ()	
(3) (Pour) scented water on monks is another way. ()	
2. 次の文の S, V, O, C を指摘しなさい。	
(1) The ruins that remain today are a UNESCO World Heritage Site.	
☆(2) We showed him some pictures of Kyoto.	
☆(3) I found the bottle empty.	
C 今日の授業でわかったこと、わからなかったこと etc.	
D 今日の自己評価	
/10	

(図 1 ポートフォリオの例)

2.3 ラーニング・ポートフォリオ作成・回収について

学生のラーニング・ポートフォリオの作成についての詳細は次の通りである。

前節で説明したように、ポートフォリオはその日の授業で進む予定の内容で、特に学生に理解して欲しい文法事項や単語等を事前に選んでおく。学生が5分ぐらいで解答し、さらに授業を振り返ってコメントを記入することができるように、クラスの難易度や授業の進度に合わせて設問を5～6問程度用意している。

筆者の授業では、ポートフォリオの設問に解答できない場合は、授業中にメモをとったノートや教科書を見て記入してよいことになっている。ただし、解答できない場合でも友人に聞いてはならず、教科書やノートを参考に、最後まで自力で取り組むというルールを予め設けてある。

このようなルールを設けたのは、次の2つの理由からである。まず、授業後のポートフォリオで完全解答を要求しているのではなく、ポートフォリオの記入を念頭において授業に臨んでもらい、授業中も積極的にメモを残す習慣をつけて欲しいということ、そして解答の出来不出来は評価の対象にしないため、学生のその日の理解度をポートフォリオにそのまま反映させることをねらいとしているからである。

ポートフォリオの最後には10点満点の自己評価欄を設け、その日の授業の自己評価をしてもらう。学生が自己評価するため、10点満点で何点とするかは学生次第である。したがって、たとえば5点をつけたり9点をつけたりと、各学生による自己評価の点数の基準が様々であるため、その点数をそっくりそのまま教員の評価に利用はできない。このことは事前に学生に周知している。しかし、作成してきたポートフォリオを振り返る時は、自己評価の点数も学生の成長の指標になる。他人との比較ではなく、自分自身の成長の記録を視覚的に確認することが可能となる。自分が学習した成果を何らかの形で視角化することもポートフォリオの重要な役割の一つである。

春学期末には、各ポートフォリオの間違いを全て訂正したものを学生に提出してもらった。学生がポートフォリオを復習し、間違いを直すことで自分の理解不足を補うこと、そしてその結果を課題の再提出によって教員に示す。つまり、学生がどのようにフィードバックを行い、それを学習の復習に役立てたかを確認するというこの一連の過程を評価の対象にしている。

3. ポートフォリオ導入による授業の成果

学生の教育活動や授業への姿勢に対してポートフォリオが有効であったかどうか、ポートフォリオに書かれた学生のコメントと、学期末に実施したアンケート結果の分析を通じて検証する。

3.1 英語の学習内容の定着に関して

英語の学習内容の定着に関して、ポートフォリオが有効に機能しているということが、学生のコメントからうかがえる。たとえば「文型も前よりはできるようになったと思う」(2年生男子)という学生のポートフォリオのコメントからは、以前と比較して文型が理解できるようになったことを自覚していることが読み取れる。また、「疑問詞の使い方が少し分かった」(1年生男子)というコメントからは、この学生が疑問詞の用法をまだ十分に理解しておらず、授業を通じて疑問詞が「少し分かった」という、これまでの自己省察と学生の課題意識が読み取れる。

アンケートでは、「分かったこと、分からなかったことを書いて可視化するのはとても良かった」(2年生男子)、「授業の復習になる」(1年生女子)、「その日の授業の要点をまとめることができる」(2年生女子)、「テストに役立つ」(2年生男子)等の学生のコメントが寄せられた。

実際に、学期末の試験でもポートフォリオで扱った問題を出題するなどして、学習内容の定着を図った。前節の図1のポートフォリオで扱った分詞の復習では、教科書やノートを見ても十分な解答ができない学生がおり、次のポートフォリオでも同様に復習を繰り返した。最終的には学期末で

も同様の問題を出題することで繰り返し復習を促し、学生の理解が深まるように努めた。

学習内容を定着させるために繰り返し問題練習を促すことは、教育現場で日常的に行われている。ポートフォリオを導入した成果という観点から見れば、学生の課題意識の自覚だけでなく、授業者もポートフォリオで学生の成長の様子を確認しながら、英語の学習内容の定着を目指すことができたということが言えよう。

3.2 授業への動機づけ

学生のコメントで「リスニングを行うとき、聞き逃しが非常に多かった」(1年生男子)という内容があった。このコメントから、学生が、自分の課題を把握していることが読み取れる。また、「インフォメーションギャップで入る単語が分かっていても意味がわからないことが多いので、分からないものは自分で調べて分かるようにしておきたい」(2年生女子)、「単語がわかりにくいのが多いので、ワードハンティングや意味取りが大変だった。自主学習を頑張っていきたい」(2年生女子)というコメントからは、その日の授業の反省と、自分自身の課題が何かを明確にしながら授業に臨む様子がうかがえる。ポートフォリオの作成を通じて授業を振り返ることで、その授業で何ができて何ができなかったのかということが自分で再確認でき、次の授業の目標を定めている様子も読み取れる。

3.3 教員の「省察」の場

一方でラーニング・ポートフォリオは、学生による学生だけのための学習過程の記録ではない。授業用のポートフォリオを作成することから、学生が作成したポートフォリオを確認するすべての過程において、教員のためのフィードバックになっている。

学生が作成したポートフォリオを回収し、目を通すと実に多くのことが明らかになる。学生によって理解度が異なること、こちらの思惑と学生の受け止め方の違い、授業進行方法に関する反省点などである。

例えば、ある項目について解説しても、学生の理解度によって受け止め方は異なる。授業中になるべく学生と口答でやりとりし、学生の理解度を確認しながら進めようと試みているが、授業中には表面化しなかった事柄がポートフォリオに記録されているのを見るたびに、愕然とさせられることも少なくない。予め予定していた教授内容のうち、特に強調して学生に伝えつつもであった内容がこちらの意に反して理解されていなかったり、誤解されていたということが浮き彫りになることもある。

ポートフォリオは一定の書式を取ってはいるが、学生によって書き方もコメントも様々である。教員にとって学生のポートフォリオに目を通すことは、教員の予想外の気づきの機会となる。特に、「授業での分からないところや聞きづらい質問を手軽に聞くことができる」(2年生男子)というコメントからも読み取れるように、授業中に拾い上げられなかった学生の声は、その日の授業の反省や、次の授業展開のための貴重な手がかりとなるのである。

また、教員にとっては、学生がどのような学習者か、どのように学んでいるのか、といったことを長期に渡ってポートフォリオに目を通していくことで、ある程度類推することが可能である。学生が口答では十分に伝えきれない質問や感情などもポートフォリオを通じて読み取ることができる。これらの情報は学生のカルテとして、次の教員に引き継ぎができ、次の学生指導にも役立てることができるであろう。ポートフォリオの内容次第であるが、学生の大学生活全般の状況を把握するカルテにも応用できる可能性もある。

最終的には、授業内容の見直しや復習状況を、ポートフォリオを通じて評価する。評価について佐藤(2001)は、「教師が自分自身の指導を修正し改善して次時以降のよりよい指導を実施するためであるという教師側の指導改善」(p. 10)となる側面を指摘している。同時に、学生にとっては「自らの学習状況を見つめ、気づき、修正し、改善し、促進する」(佐藤, 2001, p. 10)ためのものとな

る。

こうした点でポートフォリオは、学生の授業の振り返りを通じた学生の動機づけの向上と、新しい評価方法であるという2つの要素を含んだものであると言えよう。日常のテストや受験のような他人との比較ではなく、自己の成長過程を視覚化し、自分の到達度を確認するという作業を通じて、英語学習者に多く見られる劣等感や無関心とは無縁の、積極的、効果的な学習の実現が望まれる。

3.4 小活

ラーニング・ポートフォリオを実施する意味は何か。それは、学習した内容を振り返り、可視化することで教育的効果が期待できること、また、書きためたポートフォリオによって、学生の達成度や進捗状況の確認ができることである。1年を通じて、自分はこれだけやったのだという何らかの達成感が得られる可能性もある。溝上(1997)の指摘のように、外的要因が動機づけとなって学習意欲が向上するならば、差し迫った受験や検定試験など、英語学習の明確な目的が必ずしもない学生の場合、ポートフォリオの振り返りによって、英語 I、あるいは英語 III でこれだけ勉強したということが視覚的に実感できる機会となる。しかも他の学生との比較によって評価されることはないため、少なくともポートフォリオの作成、振り返りによって自信を失い、学習意欲が減少する可能性は少ないと考える。

前節の学生のコメントとアンケート結果からは、ポートフォリオ作成時に、学生がその日の授業の内容や自分の取り組みを振り返っていることが分かる。また、アンケート結果でも、振り返りと可視化について言及されている。ポートフォリオは、他人と比較することなく自己省察を行い、自分の成長の変化に気付く機会であると言えよう。

4 今後の課題

本稿で述べてきたラーニング・ポートフォリオは、筆者にとって初めての試みであるため、常に試行錯誤を要している。果たして学生にとってラ

ーニング・ポートフォリオは、学生の内発的動機づけに結びついたのであろうか。今後も教員側で修正を加えながらラーニング・ポートフォリオを継続し、秋学期末には春学期同様にアンケートを実施する予定である。

春学期の学生のポートフォリオに関する課題は3点挙げられる。クラスによっても状況は異なるが、まず第1に、毎週ポートフォリオを作成しているうちに学生の方も緊張感が薄れ、授業中にメモを取らずに過ごし、ポートフォリオでわからない問題は未記入で提出する学生が若干見られた事である。学生に返却するときは解答、解説を行うため、最終的には必ず空所を埋めて再提出してもらったが、授業中は授業に参加してポートフォリオを作成してもらうことが目的であるため、授業への参加を促す方法をさらに検討する必要がある。

第2に、学生の理解度によってポートフォリオの取り組み方が様々であるということである。教科書やノートを確認しながらポートフォリオを作成する学生もいれば、ほとんど何も見ずに解答できてしまう学生もいる。最後に一斉にポートフォリオを回収し、確認してから授業を終了するため、時間を持て余してしまう学生もいる。アンケートにも「時間が余る」(2年生男子)というコメントがあったが、ポートフォリオを作成した後、時間を持て余してしまう学生への対応も検討しなければならない。

第3に、ラーニング・ポートフォリオを継続する上で不可欠なことは、内発的動機づけにつながる外的要因をさらに具体的にすることが必要であるということである。授業に集中し、メモを取り、最後にポートフォリオで授業内容を振り返るというように、授業に臨む姿勢を変えられる可能性を見出すことができた。しかし、なぜ英語を学習するのかという根本的な問題について学生が納得していない限り、自律的学習を促すことは難しい。これは多くの大学にとっても大きな課題の1つとなっているが、各大学の学生の特性に合わせた、その大学ならではの英語学習の意味や目的を明確にすることも、英語教育の活性化のために役立つのでは

ないだろうか。

おわりに

以上、学生が授業内で学習内容を振り返り、理解度を視覚的に確認することを目的に導入したラーニング・ポートフォリオ（学習過程の記録）に関する実践報告と考察、その課題について検討した。学生のコメントやアンケート結果を、(1) 英語の学習内容の定着に関して、(2) 授業への動機づけ、そして、(3) 授業者による学生の学習状況の把握、という3つの観点から分析した。

その結果、春学期を通じて、ラーニング・ポートフォリオは、学生が自らの作品集を通じて自己省察する媒体であると同時に、教員自身の省察と学生を理解し、授業を展開していくための資料となることが改めて明らかになった。

最後に、授業内でのラーニング・ポートフォリオの分析と同時に、今後のポートフォリオ研究で不可欠なことは、溝上(1997)も指摘する大学や学生の違いを考慮した上での学習意欲の研究の必要性である。ラーニング・ポートフォリオは国内でも注目を集めており、様々な大学で様々な方法で取り入れられている。それぞれの大学が目指す方向性を念頭におきながら、例えば英語関連の分野を専攻している、将来仕事で使用する、就職を目的とした検定試験の対策などといった、具体的なニーズに即した授業を展開していくこと、そしてその上で学生の学習への動機づけを高めていくことが今後の課題である。

注

1 例えば英語の検定試験でよい成績を取ることが就職に有利に働く場合がある。このような外的要因が動機づけとなって、学習意欲が向上することがある(外発的動機づけ)。溝上(1997)は、外発的動機づけがきっかけとなって、内発的動機づけへと発展することを指摘している。

2 Sanseido Word-Wise Web

<http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/topic/1>

0minnw/039portfolio.html (閲覧日: 2015年8月10日)

³ 文部科学省 HP: 用語集

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf (閲覧日: 2015年8月10日)

参考文献

Bernstein D., Burnett A. G., Goodburn A., Savory P. (2006). *Making Teaching and Learning Visible: Course Portfolios and the Peer Review of Teaching*. California. Anker Publishing Company, INC.

Danielson C. & Abrutyn L. (1997). *An Introduction to Using Portfolios in the Classroom*. Virginia. Association for Supervision and Curriculum Development.

深瀬道晴, 堀江郁美, 立田ルミ (2013) 「獨協大学情報学研究所におけるポートフォリオ活用」『研究報告コンピュータと教育 (CE)』Vol. 2013-CE-119(14), 1-8.

河野義章 (2013) 「大学における授業振り返りシート導入の試み」『昭和女子大学生生活心理研究所紀要』15, 11-20.

溝上慎一 (1997) 「大学生の学習意欲」『京都大学高等教育研究』第2号, 184-197.

Mori K. (2015) Survey of Learning Portfolios: Toward a Portfolio Design for EFL Learners. *Christ and the World*, 25, 216-234.

西岡加名恵 (2003) 『教科と総合に活かすポートフォリオ評価法—新たな評価基準の創出に向けて—』図書文化社。

小田勝己 (1999) 『総合的な学習に適したポートフォリオ学習と評価』学事出版株式会社。

小田勝己 (2001) 『子どもの成長を促すポートフォリオで学力形成』学事出版株式会社。

佐藤 真 (編著) (2001) 『基礎からわかるポート

大学英語教育におけるラーニング・ポートフォリオの実践

- フォリオのつくりかた・すすめ方』東洋館出版社。
- 田中耕治（監訳）（2001）『ポートフォリオをデザインする—教育評価への新しい挑戦—』ミネルヴァ書房。
- 田中耕治（2008）『教育評価』岩波書店。
- 土持ゲーリー法一（2007）『ティーチング・ポートフォリオ—授業改善の秘訣』東進堂。
- 土持ゲーリー法一（2011）『ポートフォリオが日本の大学を変える：ティーチングラーニングアカデミックポートフォリオの活用』東進堂。
- 塚原修一（2014）「高等教育政策の科学をめざして」『研究技術計画』（研究・技術計画学会）Vol. 29, No. 1：2-3。